

# 経済・金融 フラッシュ

## 11月マネー統計 ～投資信託が10ヵ月連続のマイナスに

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

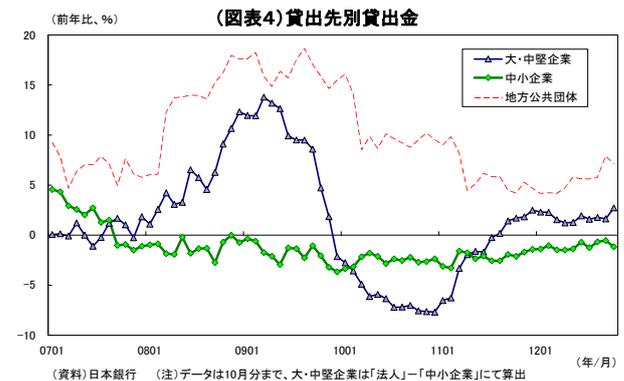
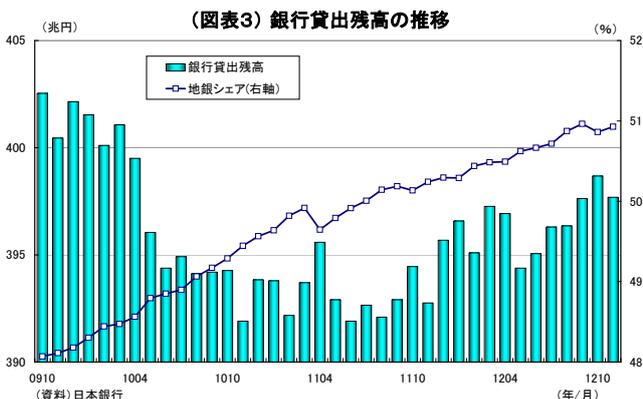
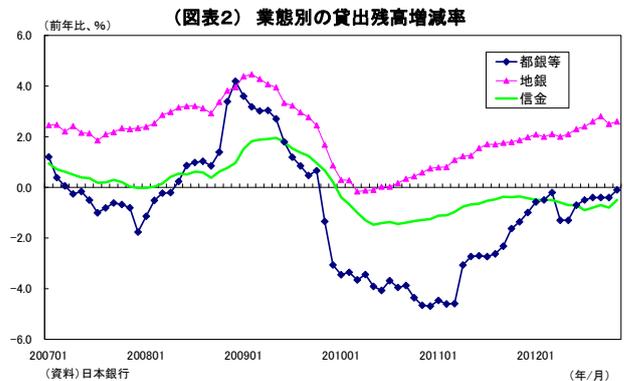
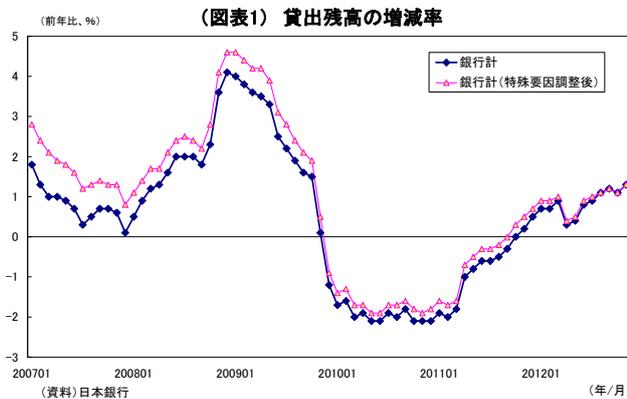
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

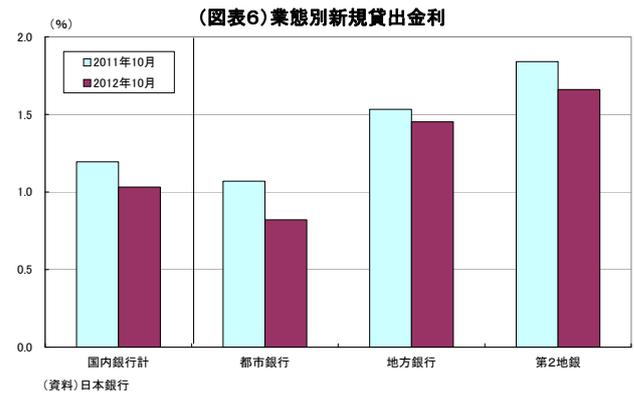
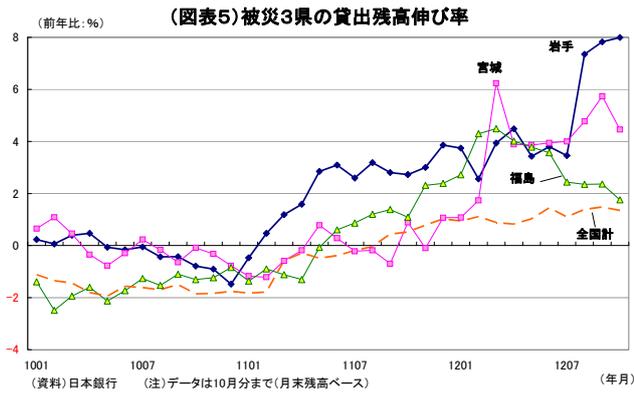
### 1. 貸出動向：およそ3年ぶりの伸び率に

日銀が12月10日に発表した11月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行貸出(平残)の伸び率は前年比1.3%と、4ヵ月連続の1%超え、かつ伸び率は2009年10月以来およそ3年ぶりの高水準となった。

業態別で見ると、地銀(第2地銀を含む)の伸び率が前年比2.6%(前月改定値は同2.5%)と引き続き堅調をキープ。都銀等ははまだマイナス圏を脱していないものの対前年▲0.1%(前月は同▲0.4%)と、マイナス幅をかなり縮小している。貸出先別の趨勢では、大・中堅企業向けや地方公共団体向けがプラスを維持しているうえ、長期にわたり減少を続けてきた中小企業向けのマイナス幅も縮小傾向にある(図表1～5)。

一方、銀行の貸出金利を見ると(図表6)、金融緩和に伴う国債利回り低下や厳しい競争を反映して、前年に比べて各業態そろって貸出金利の低下がみられる(図表6)。資金調達サイドの預金金利については低下余地が従来から殆ど無いため、貸出金利の低下は銀行の利ざや圧迫要因になっている。



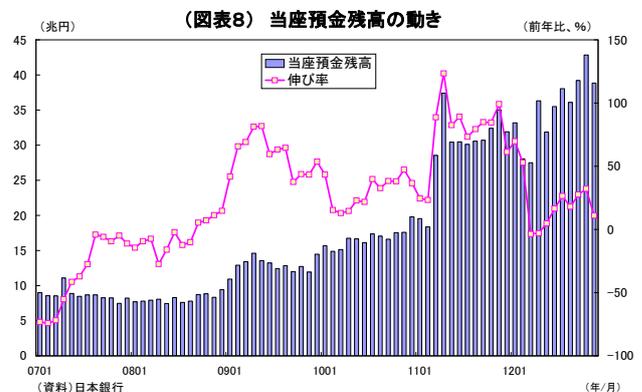
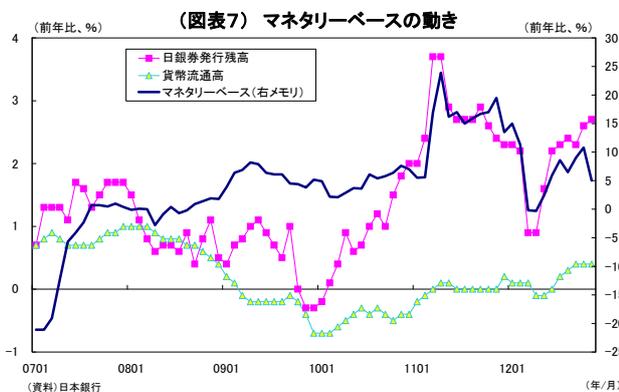


貸出残高の行方については、日銀が貸出を促す新たな枠組み導入を決定しており、詳細未定ながら今後の追い風になることが期待される。一方で、最近の国内景気後退感などに伴う企業マインド悪化が資金需要低迷に繋がりがねないだけに、まだまだ警戒が必要な情勢にある。

## 2. マネタリーベース：過去2番目の高水準

12月4日に発表された日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す11月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比 5.0%と前月の同 10.8%から縮小した。日銀当座預金の伸び率が前年比 10.9%(前月は同 32.2%)と縮小し、伸び率を押し下げた。昨年10月末~11月にかけての10兆円規模の為替介入によって比較対象となる昨年11月のマネタリーベースが膨れ上がったため、反動が出た面がある。しかしながら、季節調整済み前月比年率の伸び率で見ても▲13.3%とマイナスになっている。資産買入れ等基金のうち上限達成目処が立っている共通担保資金供給オペの実施を控えたことも影響していると思われる(図表7,8)。

ただし、水準で見ると、マネタリーベース残高(平残)124.4兆円は過去2番目の高水準である。日銀はこれまで度重なる追加緩和によって資産買入れ等基金を増額してきた。今後も同基金による資金供給が続くため、マネタリーベースは前年比プラスを維持し続ける見通し。

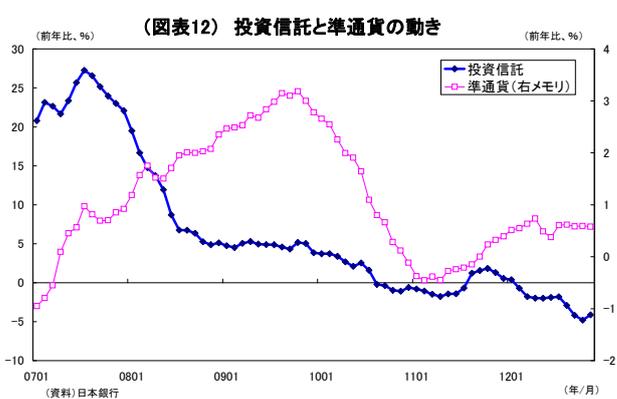
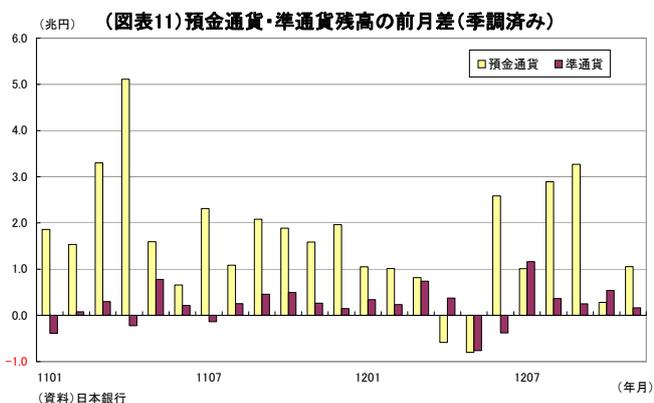
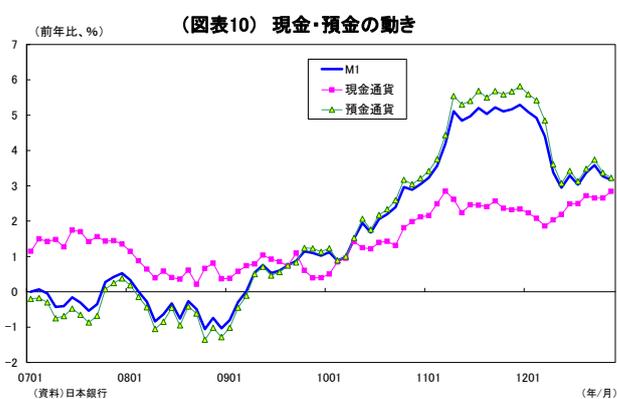
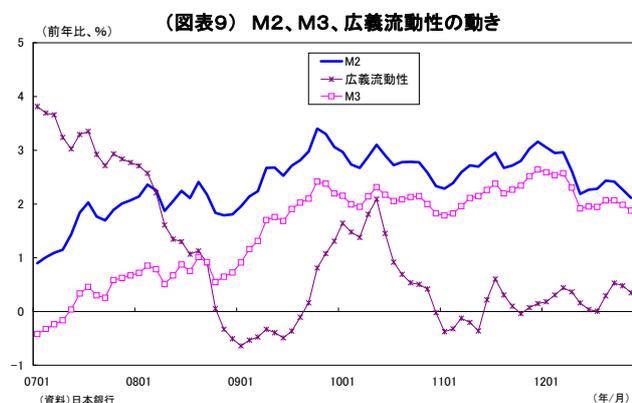


### 3. マネーストック：投資信託が10ヵ月連続のマイナスに

通貨供給量の代表的指標である11月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高の伸び率は前年比2.1%（前月は2.3%）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同1.9%（前月改定値は2.0%）とともに前月から伸び率が縮小した。M3に投信や外債などを含めた広義流動性の伸び率も前年比0.3%（前月改定値は0.5%）と同じく伸び率が縮小している（図表9）。

11月は普通預金などの預金通貨の前年比伸び率がやや低下したが、季節調整済み前月差で見るとプラス幅を広げているほか、現金通貨の前年比伸び率も拡大している。一方、投資信託（元本ベース）は対前年▲4.1%と、前月の同▲4.8%からは改善したとはいえ10ヵ月連続の前年割れ、かつ残高は08年12月以来の低水準を記録している（図表10～12）。

11月中旬以降、円安・株高など投資環境に顕著な改善がみられたものの、マネーのリスク回避的な姿勢は依然として根強く残っているようだ。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保證するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。